

彼女は美しかった

孔田多紀

彼女がわたしの部屋に来て一週間が経つ。

生きていた頃は、顔くらいは知っていた。日本のK党の議員だった。四十半ばのおばちゃんだったけど、きれいだったよ。彼女は美しかった。

でも、今はずっと血の気のひいた顔をしている。

ちょうど一週間前の水曜日ソファで目を覚ますと、心臓に穴があいて青い顔をした彼女が天井にはりついていたのだった。正体に気づくのに時間はかかった。血がにじんだオフホワイトのスーツ。演説中に死んだ女。なんでボストンなんかに？

部屋は薄暗かったけどテレビがつけっぱなしで、わざとらしい笑い声が五秒に一回は部屋中に響いた。寝る前に刑事ドラマを見ていたんだ。わたしは生まれて初めての金縛りで動けなくて、しばらく見つめ合うしかなかった。でも三分で飽きてしまった。

そんなところになくても、あなたの希望、聞きますよ。できることなら。黒くて長い髪が、伸ばした足と逆方向に広がっている彼女に、休戦を申し出た。

むっつり黙ったままだった。

無視かよ！ ため息が出る。奥歯をぐっと噛みしめると上半身は動かされたけど、下半身は無理だった。なんだか、全体的に冷たく重く痺れているようなのだ。他にすることもなくて、久しぶりに腹筋運動に精を出した。そのうち朝になった。

それがわたしたちの出会いだった。

東京の街なかで、車の上から有権者に支持を訴えていた彼女が銃で撃たれたのは、先週の日曜日だった。こっちでも記事がいくつか出て、プライムタイムでカツラのキャスターがぶつぶつコメントしたりしていた。それから三日あとで、彼女はわたしのアパートにやってきた。

そのあいだ、何をやってたの？

ノー・コメント。

日本人の彼女がわたしの大学に留学していたのは、二十年ほど前だ。卒業してからも何度か、大学を訪ねにきていたみたいで、一度、教授から紹介されたことがある。もう三年くらい前だけど。K党の闘士だったなんて、すっかり忘れていた。

事件の扱いは向こうのほうがよっぽど大きいらるうに、どうしてこんなところにやってきたんだろう。もしわたしが撃たれたんだったら、二十年も前に海外に住んでいたことなんか、思い出さないだろう。悲しんでくれる人や、神様みたいに崇めてくれる人が大勢いるに違いないもの。そっちのほうが居心地いいんじゃないかなあ、寒い安アパートより。

そういうと黙ったまま首をふった。ちょっとだけ唇をとがらせたように見えた。変なの。

わたしは一日最低でも六時間は勉強を欠かさない。そのあいだ、彼女はパソコンでYouTubeを見たりしている。この前は母国のK党の政見放送を見ていた。わたしも少し手をとめて、横からディスプレイを眺めた。

へーえ、この眼鏡の男がリーダーなんだ。わりとかわいい顔してるね。

ノー・コメント。

彼女が演説していた選挙では、K党はキー・ポイント的な立場にいた。ちょっと複雑だから、気分転換に、政治学者の卵のわたしが解説して進ぜよう。

日本の政権は長いこと、J党が牛耳っていた。でもこここのところ落ち目になってきて、そこにOっていう心臓の小さい政治家がリーダーのM党が台頭、先に上院で第一党になった。で、次の下院選挙ではどちらの党が勝つか、注目されていたのだ。歴史の長いJ党にくらべて、M党は小さい党の寄せ集めだったから、組織が盤石じゃなかった。ブームが終わったら一気に瓦解する可能性もあった。

どっちに転ぶかわからない。そこで目をつけられたのが、K党だった。

日本のK党はずっと、選挙ではすべての選挙区で候補を立てていた。たとえゴジラに立ち向かうアリみたいな候補者でも。けど選挙には供託金制度というのがあるから、出るだけでもお金がいる。先に預けた供託金はあるていど票が得られると戻ってくるんだけど、全選挙区に候補を立てるとなると、負け戦でカモられるのは馬鹿にならない額だ。だから、二〇〇四年にはその方針を廃止した。

そして今年、K党は岐路に立っていたのだ。全体的には追い風だった。プアーな若者がすごく増えていて、八十年も昔に書かれたプロパガンダ小説がベストセラーになって、万単位で新規入党者を集めたりしていた（らしい）。そのため、次の選挙では候補は半分に減らして、戦力を集中的に固める方針が検討されていた。

そこへ、政権党のJ党が横槍を入れた。供託金没収のハードルを下げる法案を通したのだ。

没収のハードルが下がれば、負けてもお金が戻ってきやすくなる。となればこれまで通り、ほとんど全ての区に候補を立てて「K党」のブランドイメージを守ることもできる。

もちろん、J党の狙いは票と戦力の分散にある。K党の候補者が増えれば、J党と敵対する二番手のM党に入るはずだった票を吸収してくれて、J党が一人勝ちする可能性が高くなる。イデオロギー軸的には正しい戦略だといえるでしょう。

彼女は候補者増加には反対だった。同じ意見の仲間もたくさんいたけど、以前通りにやりたい人も多かった。そんな内部の意見の衝突はおくびにも出さずに、彼女はあの日曜日、選挙カーの上でマイクを握っていた。

あー、しゃべり疲れた。長い解説だった……。

今は二人で、「セックス・アンド・ザ・シティ」の再放送を観ている。ヒロインの一人が、お試し期間にあった若ハゲで大金持ちの企業家がマザコンで別れて、違うヒロインに慰められている。わたしは近くで買ってきたピザを、ミネラル・ウォーターで流し込む。

考えてみれば、最近のわたしは勉強しかしてなくて、男の子からデートに誘われることもない。

彼女はとうだったんだろう。

胸に穴があく前は、馬みたいに面長のサラ・ジェシカ・パーカーよりは東洋的に小顔できれいだったから（わたしの印象）、普段そういう話も、あったんじゃないだろうか。横目でうかがうと、ソファの上でひざを抱えて、じっと画面に顔を向けている。

なんだかむなしくなってきた。

チャンネル変えよっか。なんかずーっと観てるさ、田舎女の鍛えあげられたたくましい妄想を見せられている気分になるんだよ、とわたしはいった。

たまにボソッとつぶやく以外は、彼女がしゃべることはほとんどない。

昨日の夜、研究室から駐車場に向かう構内の暗い道で、とつぜんやってきた強盗にわたしが財布を奪われているあいだも、ずっと黙っていた。

犯罪心理学コースを作って、元FBIのスター捜査官を客員教授にやとう金でさ、このファ*クンな犯罪者大通りに、外灯がいくつ作れると思う？

沈黙。

わたしはどきどきして、早口になっていた。怖かったけど、まだ時間もそう遅くないからか、強く殴られたりはしなかったし、免許もIDも無事だったけど、中に入っていたお金はけっこう必要で、クレジットカードもとられた。後でカード会社に電話しないと。

あんたもさ、わたしの部屋に居候するくらいだったら、それくらい役に立ってよ。あんな強盗なんか、メじゃないだろ。

沈黙。沈黙。沈黙。

だけど家に戻ってしばらくすると、ふらっとどこかへ出かけたと思ったら、わたしの財布を持って玄関に立っていたから、気にしてくれてはいたのだ。

中のお金は、なぜか少し増えていたけど。

日本で、狙撃事件の犯人がつかまった。

突き止めたのは、実は彼女自身であることを、わたしは知っている。

わたしが大学にいるあいだ、インターネット上で出回っている自分が撃たれたときの動画や、グーグルの地図を見たりして、あとは執念と知恵とゴースト・パワーでたどりついたのだ。

わたしはただ、一緒にテレビを観てただけで、何もしていない（しかし幽霊はテレビを観て面白いのだろうか）。

犯人は、近くにあるビルのダーツ・バーのバルコニーから撃ったそうだ。

そしてその黒幕は.....、ま、いいか。やめとこう。

留学していたときね、彼女は君の、あの部屋に住んでいたんだ、そういえば。

独りになった朝、研究室で、新聞記事を読んでいた教授はそう教えてくれた。

初めて知ったので、わたしは素直に驚いた。ワオ。

アパートはリフォームしたばかりで、なのに家賃が安いんだと、自慢していたっけなあ。大家のおばさんが留学生に優しく、よくしてもらってたって。

今じゃ建物は流行おくれになり、部屋の窓から外に見えるのは、暗くすすけたビル群と広い河口。ここで景色をながめながら、勉強したりしていたのだろうか。

しかしね、あの事件があってから、テレビで選挙演説を見てると、それが誰であっても、こいつもいつか撃たれるんじゃないか、とってしまうよ、と教授。この前の大統領選、選挙が近づくほど、話の調子も聴衆もヒートアップしていくんだけど、どこか意識がヒヤヒヤして、内容を聴くどころじゃなくて、……。

と、教授は話し続けるのだが、わたしも彼の言葉が引っかかった。たしかに、今の部屋は家賃の安さが魅力なのだが、二十年前にリニューアルされたばかりの時にも自慢できるほど安かったというのは妙だ。これまで人生を過ごした中で、靈感ゼロだという自負はあるが、……あの物件、昔から何かあるのだろうか。

わたしも想像する。真夜中、疲れ果ててついソファで眠ってしまったわたしが目を覚ますと、射殺された政治家たちが、彼女の紹介でウチにテレビとYouTubeを見にやってきて、天井からじっと見つめている……。

やれやれ。

独りでいると、部屋が以前よりも広く、ガランとしたように感じるのだが、彼女のあの、お別れの言葉もなく押し黙ったまま消えていった横顔を思い出すと、ちょっとだけ、腹がたちもするのだ。

彼女は美しかった

<http://p.booklog.jp/book/90180>

著者：孔田多紀

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kkkbest/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/90180>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/90180>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ